

鳥インフルエンザ—— 新しい展開への考察⑥(最終回)

加藤宏光

失意

茫然自失のうちに、鶏太の飼養する四〇万羽のニワトリ全部が殺処分された。鶏太は、尊敬する亡父、鶏一郎の地道な努力を引き継いでさらに飛躍させたかった。

折しも沸き起こった、農業の国際競争にわが国が耐えうるように、という意味合いで設定されたウルグアイラウンドに対応するためのL資金、制度資金を導入し、積極的に増羽を始めて十年余、借入総額は一〇億円に上っている。金利は一%で二十五年返済という有利な資金ではあったが、据置期間が二年あるために返済総額は一億六〇〇万円ほどにしか残っていない。残債が八億以上も残っているのである。

しかし、彼にとって何より悔しいのは、年末の高卵価に向けた出荷が一切できないことである。彼には一羽のニワトリも残されていないのだから…。

当初の殺処分作業は、行政担当の立ち会いの下、土木建設業界の協力で行われた。このため、慣れない作業に手間取り、一日に一万五〇〇〇

羽止まりが処理の限界である。

また、最初の小規模農場では、アメリカで実施されている醗酵処理をシミュレーションするために、オガクズと混ぜてコンポスト化が図られた。しかし、予想以上の手間がかかり、産業廃棄物処理用の焼却炉を用いるようになった。それでも鶏太の農場処理の際にも、一日三万羽を処理するのが限度であった。

「実際、茨城で処理されているニワトリの焼却は、一般ごみの一〇%程度を限度として実施され、それでもニワトリの脂肪の燃焼による発熱で炉の傷みが極めて厳しいそうです。こうした事情を踏まえて、今後こういった大羽数のA問題が出たときに、果たして焼却炉使用というオプションが期待できるものか否かが危ぶまれています」

鶏太の農場全体の処理が終了するのに二週間近くかかった。鶏太はその処理全部に立ち会ったのであるが、その二週間、いつ食事をして、いつ床についたのかも定かに覚えていない。彼の人生において、この十日余りはまったくの空白、白昼夢とってよい。作業が終了すると、何

も残っていない。ニワトリも、タマゴも、そしていつも頭を悩まされていた鶏糞さえも。

毎日が《無》である現実を鶏太は初めて経験した。その中で、鶏太にとっての救いはヒナ子の動じない態度であった。

「あなた『少しゆっくりしなさい』って神様が時間を下さったのかもしれないですね！ 私が嫁いだのが七年前。その前にお義父様からお仕事を受け継いだ、とおっしゃってましたから、もう十年も休みなしに頑張ってたらしめたでしょう？」

ヒナ子は、無力感に苛まれる鶏太に、折に触れてこう言葉をかける。ヒナ子の言葉は最初、鶏太にムカッ腹を立たせた。しかし、彼を思いやるヒナ子の心根が分かる彼は、黙って彼女の言葉を聞いていた。

何度かこういった言葉を耳にするうち、鶏太の空っぽになった心にも少しずつ、何かが芽生えはじめた。

再起への道

事件の勃発から足かけ三カ月、収入は途絶えていたが、昨年の高卵価のおかげで、かなりの余裕が銀行に

貯えられていた。制度資金の返済期日は、来年の春である。昨年、銀行から急遽行った繋ぎ資金は昨年中に返し終わった。

「高卵価はありがたいものです。東北地方を二十六年前に襲った豪雪で、ほとんど壊滅といえる被害を受けた当時二〇万羽の採卵生産者は、繋ぎ資金を当時で七〇〇〇万円借り入れ、大至急で鶏舎を再建しました。幸い年明けから二年間は歴史に残る高卵価で、その生産者は大被害の翌年には十分な利益を計上しました。当時、養鶏専門の臨床獣医師として二、三年の経験しかなかった筆者は、高卵価を上昇気流として捉えることの有利性を実感したものです」

再生に向かつて鶏太が最初に実行に移したのは、地方行政への補償金額の交渉である。補償に対する具体的な交渉を県に対して行うことは、昨年のHPAI発生時に知った。

「茨城県に対する補償の交渉は、被害を受けた生産者が個別に行っている、との話を聞きました。また、県にとってもA-1問題はすべてが初めてのことで、個別の交渉に対しても手探り状態のことです。今回のよ

うな大事件の場合、被害者が窓口を一本化することが重要だと思っておりますが」

鶏太の全鶏群について経理的な残存価格が計算され、加重平均で一羽当たり四五〇円と判定された。また、業界が新設した互助基金から五五〇円、さらに保険から五〇円が補償として得られることになった。

全群が淘汰された鶏太のエリアでは、淘汰後二カ月を経て移動禁止が解除された。損害は直接被害が五億四〇〇〇万円ほどになるが、補償金額は一羽当たり一〇五〇円となった。合計四億六〇〇〇万円である。差損は一億二〇〇〇万円、これまでの残債と合わせて九億六〇〇〇万円となる。確かに大きい負債であるが、二十五年返済で考えると、単純計算でキロ六円足らずの負担となる。もし被害のみで計算すれば、五〇銭と

なる。鶏太が三十二歳で農場の近代化を計画したときに、二十五年という長い期間で返済する優位性のためにめりこんだわけではない。中小企業の特典償却等を組み合わせることで、返済を繰り上げ、規模拡大の

ペースを早めることまで計算に入っていた。

改めて試算した鶏太は、実質被害については長期的展望で見るとき、経営にさほど大きな悪影響を及ぼすわけではないことを理解した。それよりも、目前の大きな問題、障害は失われた市場の回復。前回のHPAIに際して起きた流通のパニックに比較すると、今回のLPAIに際しての消費者や市場の反応は激烈とはいえない。しかし、前のHPAIのときは異なり、鶏太には市場へ持ちこむ製品がない。

さらに農場の再建には、緻密な試算が要求される。例えば、検疫期間を経て、大ヒナを導入するのに発生の確認からすでに半年を経ている。もちろん大ヒナは順次発注してはいるが、実際の業務に目を移すと、さまざまな小さい問題を解決せねばならないことに気づいた。

従業員は、全殺処分を済ませるまで雇用継続をしていたが、その後全員に事情を説明して一時解雇する以外になかった。半年後に再度の雇用を申し出ても、一度に元通りの従業員数が確保できるわけではない。大ヒナの導入

は、全体のローテーションとサイズの分布を考えて、毎月四万羽ずつとして十カ月を要する。従業員の採用のみを先行させても、与える業務がない。新規事業と同様に事業の展開に応じて採用することになる。

「A-1発生に備えて一年の雇用分の資金を確保し、いざというときに備えている生産者がおられます。大変な努力ですが、現実にはそういった対応では難しい問題が発生することでしょう。仮に、一年間給料を空払いしたとします。給料をもらう従業員には業務がないのですから、職場に縛り付けることもなかなかできないでしょう。従業員の中には、こっそり他のアルバイトをする人も出るでしょう。こうしたことを踏まえて、再雇用の際に多くの問題が新たに発生するリスクが生じます。妙案はなかなかないものだと、つくづく感じさせられます」

かつての従業員は、半年もの間ただ鶏太の農場再開を待ってくれるわけではない。それぞれの生活維持のために、次の職場を求めてしまった。新たに採用される人は、業務に慣れていないので効率が悪。また、経

験が浅いため日々の作業も鶏太の指示を待つて行有様である。

しかし、鶏太の事件以降に明らかとなった三〇〇万羽を楽に超えるA I発生地域では、未だに観察処分のニワトリがウインドウレス鶏舎内に飼育されている。これらのすべてが淘汰あるいはアウトされ、浄化試験でウイルスの存在が否定されない限り、この地域では再生産のシミュレーションもできない。

当初、飼養されるニワトリが残されることに嫉妬にも似た怒りを感じた鶏太も、その後の経過を実感して、全群淘汰の自分がそれらに比較すると、まだ、いわば恵まれた条件下にあることを感じた。

H P A I発生後の再起経験が彼に勇気を与えた。計画を建てずには再起できない。しかし、これだけの被害を受けると、茫然自失の状況で再起をプログラムする意識が芽生えにくい。初めての経験であれば、こうした状況に落ち入っている期間も長くなる。

一方、どれほど酷い経験であっても、それをクリアした自信は人を勇気付けてくれる。昨年のH P A I事件から立ち直った鶏太には、再起の

決意をした今、自分がこれで終わるという気がしなかった。

希望

「あなた、私、できたみたいー」
ヒナ子が、夕食を摂りながら鶏太に語りかけた。

「何が？」

鶏太は、面食らって問い返した。

「私達結婚して七年になりますね！お義父さまには随分まだか、まだかつて急かされましたけど……」

ヒナ子は、答えるともなく言葉を続けた。

「赤ちゃん？ 子供ができたのか！？」

鶏太は大声を上げた。

「……」

ヒナ子は、少し赤くなりながら、頷いた。

「そうか。こんな時だからこそ子供が希望を持ってきてくれるんだ。ありがとう、ヒナ子」

道はまだ開けていない。しかし、

鶏太は明日からの自分の道を見つけた思いがして、ヒナ子を抱きしめた。

鶏太には試練の道が続く。しかし彼には次の世代に心をつなぐ、とい

う大きな希望が与えられた。

エピローグ

著者は一昨年（二〇〇三年）、H P A Iが七十九年ぶりに山口と京都に発生する前年に「もし、H P A Iがわが国を襲ったら」という想定でのシミュレーションを小説仕立てで本誌に連載した。その折、発生後の展開についてはあくまで読者の想像に任せる形で終わらせた。

実際のH P A I発生は、シミュレーションを上回る複雑な展開となった。浅田農産の会長ご夫妻の悲劇がさらに切羽詰まったムードを業界に与え、浅田氏の丹精込めた組織の継続が不可能になる、という最悪の転機は、一旦A Iを被ったら、例

産しかない」といった脅迫感をリアルにイメージ付けるに至った。

しかし、これまで一所懸命に経営を維持してきた生産者が「一旦AIを被ったら」といった運命を爾々と受け入れなければならないのだろうか？ また、それでよいのだろうか？ 著者は《否》と言いたい。大は小なりに、小は小なりにどのような障害でも乗り越えるべく、それこそ必死に努力するに違いない。

《一旦AIを被ったら、倒産しない》という言葉は、もしも、のケースが自分に起きる怖さのゆえに、その言葉によって思考を停止してのように思われてならない。

組織の継続に無限責任を負う経営者はすべての事態に対するフェースセーフ(セーフティネット)を考えねばならない。思考の停止よりもケースタディを必須とする。

本シリーズでは、この問題を真剣に考えることを目的としてかの源氏鶏太に再度苦悩の道を歩んでもらうことにした。

彼の復帰はこのストーリーではまだ明らかになっていない。しかし、資金とシステム再構築の概観・シミュレーションを読まれた賢明な読者

諸氏は彼の新しい夢が決して無駄に終わらないことを実感されたに違いない。彼には次世代という何より大きな夢が与えられた。

すべての人にとって、人生の目的は次世代への自分の遺伝子(思想を含めた)を継ぐことである。この夢こそが何ものにもまして大きな力となる。あとは、資金と努力。

今後のAI発生については、これまでとまったく異なった対応が要求される。それを踏まえて、自衛する意識がこの物語で少しでも生きたものになれば望外の幸せである。

二〇〇五年に茨城で発生したLPAIに関する、これまでの問題点のまとめ

昨年茨城県水海道市に端を発し、その後の調査で六三〇万羽を超える汚染が明らかとされたLPAIについて、種々の問題点が指摘されています。次に列挙してみましよう。

1. 人為感染の判断(不法ワクチン、バイオテロ)
2. コンプライアンスと検査妨害

3. ワクチン使用の条件確定

4. 拡大の定義づけ

5. 淘汰の基準と観察処分

6. 被害者の実態と保障に関する諸問題

7. 強毒タイプの発生に対する心構えと対策

8. AIへの自衛的対応と流通・消費者との関連

(ア)リスク分析

(イ)リスクの回避

(ウ)リスクのヘッジ方法

これらの問題を個別に論議するとそれだけで優に一〇ページを超える大きな課題です。

本稿は、今回のLPAI発生に際してとかくAIを恐れるあまりに思考停止に陥りがちな業界に対して『こういうときこそ、あえて前向きに取り組む心構えが必要ではないだろうか』という著者なりの考えを提示するために寄稿しました。

LPAI発生といった、ある意味では危機的な折に、一般的な業界世論を無視する形で私見を主張することでは読者の方々に共感していただけるかどうか自信がなく、あえて物語形式にしました。物語であるから

こそ、ある意味思うままに述べることもできましたが、その形式に却って反感を持たれる向きもあるかとは承知しています。

それでも敢えてこのような時期に著者の意見をご紹介したかった本意をどうかご理解いただきたいものと考えております。

さらに、平成十八年一月十日時点で茨城のAI陽性農場の従業員や防疫に関与した人々がH5N2のAIウイルスに感染した可能性が示唆される情報が厚生労働省と国立感染症研究所からリリースされました。今回の発表は、ここ数年鶏を発信源とした新型インフルエンザ発生のリスクが極めて高くなっているという国際常識とあいまって大きなセンセーションを巻き起こしています。この問題に関連するテーマを拾い上げてみました。

1. 人への感染リスクの問題で、世論の風潮が変化しつつあり、養鶏産業(特に採卵)が被害者の立場から加害者として消費者や一般の人たちに受け取られるように変遷する可能性が出てきた

2. AI汚染国として印象づけられた日本の国際的な立場が、極端に低下している

(ア)現在、アメリカではチキン由来の原材料が含まれる食品に対して、厳しい拒否的なりアクションが出ている(筆者の得た情報では、ハワイでは日本製チキンラーメンですらないとのこと)

(イ)ブラジルでは、日本のブロイラー業界からの視察に対して面会すらしてもらえなかった

(ウ)かの中国ですら、日本の養鶏産業界関係者は「汚染国から来た」と言われ警戒されるとのこと
3. この極端な国際的な汚名を払拭するために残された唯一の手段は、一刻も早い汚染鶏の淘汰とその地域の浄化であり、これを達成した後、国際的にも浄化成功と今後の対応を大々的にアピールすることが必要となる

現在、三〇〇万羽を上回る抗体陽

性鶏群がウインドウレス鶏舎内で観察下にあります。一月十四日現在のインターネット情報では、そのうち一件では判定が困難で再試験されるとありました(一月十六日、最終判定の結果、ウイルス分離陽性で殺処分と決定)。現在の行政指針では「おとり鶏に一例でもウイルス感染(抗体陽性)が確認されれば、農場全体を殺処分に付する」というように方向が転換されました。

残る二〇〇万羽余については、食鳥処理も視野に入れて処分検討中といった過程です。しかし、著者が今週(二月十六日時点)大手食鳥処理業界の経営者(複数)のご意見を聞きましたところ『人間感染の情報(不確定な段階でありながら)リリースされたことで、食鳥処理担当の従業員は感染のリスクを強烈に意識する』とのお話でした。

多少離れた環境での議論とは異なり、抗体陽性鶏を解体する作業員は作業の内容から感染するリスクが養鶏場従業員よりはるかに高いため、ご自身の従業員が不安になることは当たり前、との話を伺うと、この問題の深刻さをさらに実感します。

現在観察下にある抗体陽性鶏の処

分についての最終判断にはしばらく時間を要するでしょう。加えて、今回の厚生労働省の『人がH5N2型Aウイルスに感染した可能性あり』との情報で、食鳥処理に対するハードルは相当度高くなつたとの印象を受けました。

殺処分にしろ自衛殺にしろ、あるいは食鳥処理にしろ、色々な問題が複雑に絡むことは容易に想像されます。しかし、万難を排して一刻も早い淘汰と地域浄化を望む、という筆者の切なる願いを付記してこの稿を終えます。

いつの日か、源氏鶏太氏にはまた違った形での大活躍をして欲しいものです。(了)